View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **55**, 149-157 (2007)
武庫川女子大紀要(人文・社会科学)

高等学校のクラブ活動における指導者の暴力行為

西坂　珠美，會田　　宏
(武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)

Leadership Violence at High School Sports Club Activities

Tamami Nishisaka, Hiroshi Aida

Department of Health and Sports, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

This study seeks to illuminate the state of leadership violence in high school sports clubs and the athlete perceptions of such violence. A total of 226 female college students who engaged in sports club activities in high school responded to our survey.

The study found the following：

(1) 28.8% of the respondents experienced leadership violence. Many of those who experienced violence belonged to ball game clubs.

(2) The competence of athletes who experienced violence was higher than those who did not experience violence.

(3) The frequency of violence was higher for athletes who had more opportunities to compete in games.

(4) Much of the violence took the form of slapping. One of the most commonly cited reasons was not reaching expectations.

(5) Athletes had a tendency to think that although leadership violence was frustrating, it could not be helped because such violence was a result of their own failures. Accordingly, participants tended to be grateful toward leaders for inflicting violence because they felt that such actions helped them grow both mentally and technically.

(6) While many athletes who experienced violence believed it to be necessary at times, those who did not experience violence believed it to be is unnecessary.

(7) It is highly likely that many of the survey respondents, regardless of their experience with leader violence, will inflict violence on their future student athletes if the students do not comply with rules.

緒　言

スポーツにおいてより高い成績を目指す時，指導者が選手に対して暴力をふるうことがある．これはしばしば「行き過ぎた指導」とか「体罰」と言われ，スポーツ指導現場におけるトピックスとしてマスコミにとり立たされる．第 86 回，87 回全国高校野球選手権大会(2004 年，2005 年)において大会連覇を果たした

北海道駒澤大学付属苫小牧高校野球部の暴力事件は社会問題として大きく取り上げられ，記憶に新しい．クラブ活動において指導者が選手に暴力をふるうという行為は，学校教育法第 11 条における体罰の禁止に反するものである．なぜならば，クラブ活動は学校教育の一環として行われるため，学校教育法の適用範囲であるからである．

朝日新聞は，クラブ活動における暴力行為について特集している．そこでは，高校野球の指導者の約 6 割が体罰を容認していること[5]，体育大学の学生の約 75％がクラブ活動中の体罰に賛成していること[6]，暴力行為をうけた選手の保護者が「暴力がいけないことは分かっているが，こどもが悪い方向へ向かっている時，体を張って止めることは教師としての責任」[3]，「殴ってくれていいですよ」[4]，「殺さない程度にお願いします」[4]と語っていることなどが報告されている．これらは，クラブ活動中の体罰や暴力行為に対して監督，選手，保護者が肯定的にとらえているという事実が存在することを示している．京都市立伏見工業高等学校のラグビー部を全国大会で優勝へと導いた山口良治氏は，「いつも心で泣きながら，たたいていました．何もしないほうが，周りから何も言われないし楽ですからね．（…中略…）もちろん体罰は，絶対に許されるものではないし，しちゃいかん．力によって，自分の意図する方向にし向けようとしても，逆の方向に走ってしまう．いい結果は絶対に生まれない．体罰を訴えられるケースを見ていると，果たしてその場で指導者と子供が抱きあって泣けるだろうか．ただ悪い生徒をけっても，殴っても何もその子は変わらない．どれだけ生徒のことを思えるか．子供とのコミュニケーション，アフターケア．ともに汗を流し，涙を流せる場を作っていけるかが大事なんです」[7]と体罰や暴力行為を否定しながらも，実際には指導場面で行っている時の感情を語っている．

あらゆる指導場面において，人が人をある方向へ導く時，暴力を使用するということは，道理に反するということを，大部分の人々が頭では理解している．しかし，一部のマスコミや社会の人々の認識と事実とは大きく異なる．スポーツ指導場面における体罰や暴力行為に賛成する者もいれば，反対する者もいるのである．指導者の暴力行為の実態と，暴力を伴う指導に対する選手のとらえ方を明らかにすることができれば，スポーツ指導現場における暴力行為を減少させることができると考えられる．しかしながら指導者の暴力行為について明らかにした研究は数少ない．

そこで本研究では，高校時代にクラブ活動を行ってきた女子大生を対象に，高等学校のクラブ活動における指導者の暴力行為の実態について明らかにするとともに，暴力行為に対する選手の考え方を明らかにすることを目的とした．

方　法

1. 対象者

調査対象は，武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科の 2 年生および 3 年生合計 226 名であった．

2. 調査日時および方法

調査期間は，平成 18 年 10 月 5 日から 10 月 12 日までであった．高等学校のクラブ活動における指導者の暴力行為の実態と暴力行為を伴う指導に対する選手の感情や考えなどについて明らかにするために，アンケート調査票を作成し，それを対象者が受講している授業開始前に配布し，その場で回答させ，回収した．なお本研究では，暴力を，殴る・蹴るなどの手をあげる行為ととらえ，言葉の暴力や罰（走らせる，正座させるなど）は暴力には含めないこととした．

3. 調査項目

(1) クラブ活動における指導者の暴力行為の実態とそれに対する選手の感情

対象者全員に対して高等学校時代の所属クラブ名，クラブ活動における最も良い成績，クラブ活動中に暴力行為をうけた経験の有無を回答させた．

暴力行為をうけた経験のある選手に対しては，まず，主に暴力行為を行った指導者を「男性監督」，「女性監督」，「男性コーチ」，「女性コーチ」の中から 1 つ選択させた．

次に，高校 1 年時，高校 2 年時，高校 3 年時における暴力行為の頻度を「5：常に暴力をうけた」～「1：

全く暴力をうけていない」の5件法で回答させ，それぞれに5点～1点を与えて得点化した．またレギュラー時，非レギュラー時における暴力行為の頻度，手段別にみた暴力行為（グーで殴る，パーでビンタなど）の頻度も同様に5件法で回答させ，得点化した．

さらに，暴力行為をうけた理由を「言われたことができなかったから」，「ミスを連発したから」など11項目あげ，それぞれに対して「5：強く当てはまる」～「1：全く当てはまらない」の5件法で回答させ，5点～1点を与えて得点化した．また，暴力をうけた後の気持ちを「自分が悪い」，「指導者に腹が立つ」など7項目あげ，暴力行為をうけた結果を「思うようにプレーができるようになった」，「技術が伸びた」など7項目あげ，暴力行為を行った指導者に対しての現在の感情を「許せない」，「感謝している」など8項目あげ，これらに対しても5件法で回答させ，得点化した．

(2)　クラブ活動における暴力行為の必要性に対する選手の考え

対象者全員に対して，クラブ活動の指導場面における暴力行為の必要性を「必要」，「場合によっては必要」，「必要でない」の中から1つ選択させた．さらに，暴力行為の必要性に対する選手の考えを指導場面ごとに明らかにするために，「言ったことができなかった時」，「ミスを連発した時」などの8つの場面を設定し，それらの場面において「5：暴力行為は必要」～「1：暴力行為は全く必要でない」の5件法で回答させ，それぞれに5点～1点を与えて得点化した．

また，将来指導者になった時に暴力行為を行う可能性を明らかにするために，同様の8つの項目において「5：暴力行為を行う」～「1：暴力行為を行わない」の5件法で回答させ，それぞれに5点～1点を与えて得点化した．

(3)　暴力行為についての意見，感想，体験

クラブ活動における暴力行為に対する意見，感想，心に残っている体験などについて自由記述させた．

結　果

1.　クラブ活動における指導者の暴力行為の実態とそれに対する選手の感情

(1)　高校時代のクラブ活動中における暴力行為の有無と競技成績

高校時代のクラブ活動中に暴力行為をうけた経験のある選手が226名中65名（28.8％），ない選手が161名（71.2％）いた（表1）．

5名以上の回答が得られたクラブを対象にすると，暴力行為をうけた割合は，バレーボール部が44.1%と最も高く，次いでソフトボール部（41.7%），バスケットボール部（36.5%），ハンドボール部（35.7%），サッカー部（28.6%）の順に高く，球技の団体競技において高い値が見られた．

暴力行為をうけた経験のある選手では，全国大会に出場した選手の割合が44.5％と最も高く，次いで地区大会出場（26.2％），府県大会出場（26.2％），市内大会出場（3.1％）の順に高い値を示した．一方，暴力行為をうけた経験のない選手では，府県大会に出場した選手の割合が33.3％と最も高く，次いで全国大会出場（30.8％），地区大会出場（24.4％），市内大会出場（11.5％）の順に高い値を示した．

(2)　暴力行為の実態

暴力行為を行った指導者は，男性監督が49名（75.4％）と最も高く，次いで女性監督13名（20.0％），男性コーチ3名（4.6％）の順に高い値を示した．女性コーチは0名（0％）であった．

暴力行為をうけた頻度を学年別に見ると，「高校3年時」の平均得点が2.92±1.18と最も高く，次いで「高校2年時」（2.88±1.28），「高校1年時」（2.33±1.10）の順に高い値を示した（表2）．また，競技レベル別に見ると，「レギュラー時」（3.13±1.19）が「非レギュラー時」（1.73±1.11）より高い値を示した．

暴力行為の手段は，「パーでビンタ」（3.06±1.28）が最も高く，次いで「物（棒，ボールなど）でたたく」（2.49±1.40），「足で蹴る」（2.41±1.31），「髪の毛をつかむ」（1.83±1.29）の順に高い値を示した．一方，「グーで殴る」（1.59±1.05）が最も低い値を示した．

自由記述には，「缶コーヒーで殴られる」，「グーでフルスイング」，「鼓膜を破られる」，「椅子を飛ばされる」，「ゴミ箱を頭からかぶされる」，「椅子で殴られる」，「水をかけられる」などの回答があった．

表 **1**　クラブ別にみた暴力行為をうけた経験の有無

クラブ名	経験あり	経験なし	合計
バレーボール部	15（44.1%）	19（ 55.9%）	34
ソフトボール部	5（41.7%）	7（ 58.3%）	12
バスケットボール部	19（36.5%）	33（ 63.5%）	52
ハンドボール部	5（35.7%）	9（ 64.3%）	14
サッカー部	2（28.6%）	5（ 71.4%）	7
体操部	4（25.0%）	12（ 75.0%）	16
水泳部	3（25.0%）	9（ 75.0%）	12
テニス部	6（24.0%）	19（ 76.0%）	25
剣道部	1（20.0%）	4（ 80.0%）	5
バドミントン部	1（20.0%）	4（ 80.0%）	5
陸上競技部	2（ 9.1%）	20（ 90.9%）	22
ダンス部	0（ 0.0%）	7（100.0%）	7
その他	2（13.3%）	13（ 86.7%）	15
合　計	65 名（28.8%）	161 名（ 71.2%）	226 名

1. 数値は回答件数（割合）を示す.
2. その他は回答件数 5 件未満のクラブをまとめたもの.

表 **2**　学年別および競技レベル別にみた暴力行為の頻度

	平均得点	常に	時々	ない
高校 1 年生時	2.33 ± 1.10	7（11.6%）	22（36.7%）	31（51.7%）
高校 2 年生時	2.88 ± 1.28	19（29.7%）	20（31.2%）	25（39.1%）
高校 3 年生時	2.92 ± 1.18	19（30.1%）	18（28.6%）	26（41.3%）
レギュラー	3.13 ± 1.19	22（34.4%）	25（39.0%）	17（26.6%）
非レギュラー	1.73 ± 1.11	6（11.8%）	5（ 9.8%）	40（78.4%）

1. 数値は回答件数（割合）を示す.
2. 「常に」は 5 と 4 の回答の合計を，「時々」は 3 の回答を，「ない」は 2 と 1 の回答の合計を示す.
3. レギュラーは試合に出ているメンバーを，非レギュラーは試合に出ていないメンバーを示す.

暴力行為をうけた理由は，「言われたことができなかったから」（4.05 ± 1.18）が最も高く，次いで「ミスを連発したから」（3.80 ± 1.39），「チームが不調な時に代表で」（2.64 ± 1.67）の順に高い値を示した．一方，「部則を守らなかったから」（1.17 ± 1.13）が最も低い値を示した（表 3）.

自由記述には，「体重が落ちなかったから」，「プレーに気持ちが入っていなかったから」，「キャプテンらしくない行動をとったから」などの回答があった.

(3)　暴力行為をうけた後の感情

暴力行為をうけた後の感情は，「悔しい」（4.13 ± 1.16）が最も高く，次いで「自分が悪い」（3.88 ± 1.05），「落ち込む」（3.36 ± 1.42）の順に高い値を示した．一方，「うれしい」（1.49 ± 1.01）が最も低い値を示した（表 4）.

自由記述には，「毎日が辛かった」，「痛い」，「いい気分ではない」など悪い影響をうけたと考えられる意見が見られた．しかし，「喝が入った」，「当たって砕けろと積極的になる」，「暴力＝見てくれている」，「暴力がなければ人生終わりと思っていた」など暴力をうけることで良い影響を受けたと考えられる回答もあった.

暴力行為をうけた結果は，「精神的に強くなった」（3.73 ± 1.27）が最も高く，次いで「技術が伸びた」（2.72 ± 1.33），「自信がついた」（2.57 ± 1.32）の順に高い値を示した（表 5）．一方，「さらにクラブに行きたくなった」（2.36 ± 1.12）が最も低い値を示した.

表 **3**　暴力行為をうけた理由

	平均得点	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない
言われた事ができなかったから	4.05 ± 1.18	54（83.0%）	4（ 6.2%）	7（10.8%）
ミスを連発したから	3.80 ± 1.39	48（75.0%）	3（ 4.7%）	13（20.3%）
チームが不調なときに代表で	2.64 ± 1.67	27（42.2%）	4（ 6.2%）	33（51.6%）
原因不明だった	2.09 ± 1.44	16（25.0%）	6（ 9.4%）	42（65.6%）
質問に答えなかったから	2.08 ± 1.29	14（22.2%）	10（15.9%）	39（61.9%）
反抗したから	1.86 ± 1.28	9（14.1%）	9（14.1%）	46（71.8%）
学校規則を守らなかったから	1.68 ± 1.19	7（11.1%）	7（11.1%）	49（77.8%）
部則を守らなかったから	1.17 ± 1.13	6（ 9.5%）	9（14.3%）	48（76.2%）

1. 数値は回答件数（割合）を示す.
2. 「当てはまる」は 5 と 4 の回答の合計を，「どちらでもない」は 3 の回答を，「当てはまらない」は 2 と 1 の回答の合計を示す.

表 **4**　暴力行為をうけた後の気持ち

	平均得点	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない
悔しい	4.13 ± 1.16	52（80.0%）	6（ 9.2%）	7（10.8%）
自分が悪い	3.88 ± 1.05	48（73.8%）	10（15.4%）	7（10.8%）
落ち込む	3.36 ± 1.42	35（54.7%）	10（15.6%）	19（29.7%）
指導者に腹が立つ	3.08 ± 1.44	31（49.2%）	12（19.0%）	20（31.8%）
悲しい	3.02 ± 1.55	29（45.3%）	9（14.1%）	26（40.6%）
気合が入る	2.62 ± 1.33	18（27.7%）	17（26.2%）	30（46.1%）
自分にとってプラスだ	2.56 ± 1.37	19（29.7%）	14（21.9%）	31（48.4%）
許せない	2.28 ± 1.23	10（15.6%）	17（26.6%）	37（57.8%）
周りの反応が気になる	2.14 ± 1.13	9（14.1%）	18（28.1%）	37（57.8%）
ありがたい	1.98 ± 1.26	11（17.2%）	10（15.6%）	43（67.2%）
うれしい	1.49 ± 1.01	3（ 4.7%）	9（14.1%）	52（81.2%）

1. 数値は回答件数（割合）を示す.
2. 「当てはまる」は 5 と 4 の回答の合計を，「どちらでもない」は 3 の回答を，「当てはまらない」は 2 と 1 の回答の合計を示す.

暴力行為を行った指導者に対しての現在の感情は，指導者に対して，「感謝している」（3.33 ± 1.44）が最も高く，次いで「ありがたい」（3.02 ± 1.43），「何も思わない」（2.58 ± 1.54）の順に高い値を示した（表 6）．一方，「許せない」（1.88 ± 1.16）が最も低い値を示した.

2.　クラブ活動における暴力行為の必要性

（1）　クラブ活動における暴力行為の必要性に対する選手の考え

暴力行為をうけた経験のある選手の回答は，「場合によっては必要」（70.2%）が最も高く，次いで「必要でない」（28.0%），「必要」（1.8%）の順に高い値を示した（表 7）.

暴力行為をうけた経験のない選手の回答は，「必要でない」（69.4%）が最も高く，次いで「場合によっては必要」（25.0%），「必要」（5.6%）の順に高い値を示した（表 7）.

自由記述には，「暴力は何も解決しない」，「怯えてプレーが消極的になる」，「暴力をすれば解決だと思ってはいけない」，「愛のある暴力はない」など暴力行為を否定する意見が見られた．しかし，「暴力をうけた理由が分かると信頼関係が生まれる」，「殴る方もいい気分にはならないから，暴力は選手のために行っていると思う」，「ただの言葉だけじゃお遊びクラブになる」，「選手を思いやるのなら OK」など暴力行為を

表 **5**　暴力行為をうけた結果

	平均得点	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない
精神的に強くなった	3.73 ± 1.27	40（62.5%）	14（21.9%）	10（15.6%）
技術が伸びた	2.72 ± 1.33	18（28.1%）	20（31.3%）	26（40.6%）
自信がついた	2.57 ± 1.32	15（23.4%）	20（31.3%）	29（45.3%）
大きな大会に出場できた	2.55 ± 1.28	12（18.7%）	25（39.1%）	27（42.2%）
指導者との信頼関係ができた	2.51 ± 1.32	13（20.3%）	22（34.4%）	29（45.3%）
思うようにプレーができるようになった	2.46 ± 1.16	9（13.9%）	29（44.6%）	27（41.5%）
さらにクラブに行きたくなった	2.36 ± 1.12	9（14.1%）	26（40.6%）	29（45.3%）

1. 数値は回答件数（割合）を示す.
2. 「当てはまる」は 5 と 4 の回答の合計を，「どちらでもない」は 3 の回答を，「当てはまらない」は 2 と 1 の回答の合計を示す.

表 **6**　暴力行為を行った指導者に対しての現在の感情

	平均得点	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない
感謝している	3.33 ± 1.44	31（48.4%）	17（26.6%）	16（25.0%）
ありがたい	3.02 ± 1.43	25（39.0%）	19（29.7%）	20（31.3%）
何も思わない	2.58 ± 1.54	17（26.2%）	19（29.2%）	29（44.6%）
許せない	1.88 ± 1.16	5（ 7.8%）	15（23.4%）	44（68.8%）

1. 数値は回答件数（割合）を示す.
2. 「当てはまる」は 5 と 4 の回答の合計を，「どちらでもない」は 3 の回答を，「当てはまらない」は 2 と 1 の回答の合計を示す.

表 **7**　暴力行為の必要性

	経験あり	経験なし	合計
必要	1（ 1.8%）	9（ 5.6%）	10
場合によっては必要	46（70.2%）	40（25.0%）	46
必要でない	18（28.0%）	112（69.4%）	130
合　計	65 名（28.8%）	161 名（71.2%）	226 名

1. 数値は回答件数（割合）を示す.

肯定する回答も見られた.

（2）　指導場面別にみた暴力行為の必要性

暴力行為をうけた経験のある選手において暴力行為の必要性を認識している指導場面は，「規則を守らなかった時」（2.88 ± 1.25）が最も高く，次いで「言ったことができなかった時」（2.75 ± 1.11），「プレーを上達させたい時」（2.75 ± 1.30）の順に高い値を示した．一方，「負けた時」（1.98 ± 1.04）が最も低い値を示した（表 8）.

暴力行為をうけた経験のない選手では，「規則を守らなかった時」（2.61 ± 1.23）が最も高く，次いで「反抗した時」（2.03 ± 1.12），「プレーを上達させたい時」（1.69 ± 1.03）の順に高い値を示した．一方，「負けた時」（1.24 ± 0.58）が最も低い値を示した（表 8）.

自由記述には，「言ってもわかってくれない時の手段として暴力が必要」，「人格教育としては必要」などの回答が見られた.

暴力行為をうけた経験のある選手において暴力行為を行う可能性のある指導場面は，「規則を守らなかっ

た時」(2.43±1.33)が最も高く,次いで「ミスを連発した時」(2.33±1.29),「プレーを上達させたい時」(2.25±1.29)の順に高い値を示した．一方,「負けた時」(1.70±1.00)が最も低い値を示した(表8).

暴力行為をうけた経験のない選手では,「規則を守らなかった時」(2.18±1.21)が最も高く，次いで「反抗した時」(1.69±1.02),「質問に答えなかった時」(1.40±0.72)の順に高い値を示した．一方,「負けた時」(1.18±0.56)が最も低い値を示した(表8).

表**8**　指導場面別に見た暴力行為の必要性と将来の可能性

		暴力をうけた経験あり	暴力をうけた経験なし
規則を守らなかった時	必要性の認識	2.88±1.25	2.61±1.23
	将来の可能性	2.43±1.33	2.18±1.21
言ったことができなかった時	必要性の認識	2.75±1.11	1.49±0.81
	将来の可能性	2.13±1.19	1.33±0.67
プレーを上達させたい時	必要性の認識	2.75±1.30	1.69±1.03
	将来の可能性	2.25±1.29	1.37±0.45
ミスを連発した時	必要性の認識	2.68±1.20	1.63±0.96
	将来の可能性	2.33±1.29	1.37±0.73
試合に勝たせたい時	必要性の認識	2.61±1.31	1.63±1.04
	将来の可能性	2.22±1.33	1.39±0.79
反抗した時	必要性の認識	2.63±1.28	2.03±1.12
	将来の可能性	2.19±1.26	1.69±1.02
質問に答えなかった時	必要性の認識	2.35±1.09	1.61±0.90
	将来の可能性	1.95±1.10	1.40±0.72
負けた時	必要性の認識	1.98±1.04	1.24±0.58
	将来の可能性	1.70±1.00	1.18±0.56

1. 数値は平均得点±標準偏差を示す.

考　察

本研究では,高等学校の運動部活動において指導者に暴力行為をうけた選手は,全体の約30%いること,それは球技の団体種目に多いことが明らかになった.

阿江[1)]は，スポーツ指導者を目指している女子体育大学生596名を対象に本研究と同様の調査を行い,中学，高校時代に暴力行為をうけた経験のある選手が223名(37.0%)いること，暴力行為をうけた経験は,バレーボール部が最も高く，次いでバスケットボール部，ソフトテニス部の順に高いことを報告している.この報告は本研究と同様の結果である.

また，本研究では，暴力行為をうけた経験のある選手は，経験のない選手より競技成績が高く，学年が上がる，あるいは試合出場の機会が増加すると，暴力行為をうける経験が多くなる傾向が認められた．さらに，指導者に求められたことができなかったり，ミスが続くなどのプレーの失敗に関することで暴力行為をうけていること，そのため，選手は悔しいと感じながらも，暴力行為をうけた原因は自分にあると考えていること，暴力行為をうけた経験のある選手は，自己の精神面，技術面における成長を実感しており,クラブ活動から退いた後も暴力行為を行う指導者に対して感謝の念を抱く傾向にあることなどが認められた.

指導場面における暴力行為の必要性を問う質問に対しては,暴力行為をうけた経験の有無に関わらず「必要」と答えた選手が少ないことから，暴力行為を全面的に肯定している選手は少ないことが分かった．しかし，暴力行為をうけた経験のない選手のうちの69.4%が暴力を伴う指導は「必要でない」と回答しているのに対し，暴力行為をうけた経験のある選手のうちの70.2%が暴力を伴う指導は「場合によっては必要」と回答していることから,暴力行為をうけた経験のある選手の方が経験のない選手よりも,場合や状況によっ

ては暴力行為が必要と考えているという事実が明らかになった．また，暴力行為が必要な場面は，暴力行為をうけた経験のある選手は，特にプレーに関する指導場面で暴力行為が必要と考えているのに対し，経験のない選手は，特に選手の生活態度や指導者にとる態度に関する指導場面で暴力行為が必要だと考えていた．さらに，指導場面において暴力行為を使用する可能性は，すべての項目において暴力行為をうけた経験のある選手の方が高い値を示した．

1995 年まで 29 年間，和歌山県立箕島高校野球部監督を務め，甲子園で 35 勝をあげた尾藤公氏は，「母校では捕手，走者を置いて打たれると，投手ではなく自分がビンタされた．涙が出た．でもそれを『暴力』『体罰』と思わないほど，当たり前のことだった．自分が指導者になっても気がつけば同じことをしていた」[4]と語っている．また，埼玉県立豊岡高校の野中祐之監督は，「殴られると，今度は誰かを殴ってしまう．暴力で人間関係は作れない」[4]と語っている．さらに，阿江[1]も，「暴力体験のある者ほど将来の自分の指導行動に暴力を用いる」と考察している．過去の競技歴において暴力行為をうけた経験のある選手ほど，自分も同じ行動を繰り返す傾向があると考えられる．暴力行為を伴う指導に耐え，精神的にも技術的にも大きく成長を遂げたからこそ，納得のいく競技成績を残すことができたという選手の思い込みともとれる成功体験が，指導場面における暴力行為の連鎖を生むものと推察される．

ところで，暴力行為をうけた経験のある選手は，プレーに関する指導場面で暴力行為をうけた頻度が高かった．しかし，指導者になった時には規則に関する指導場面において暴力行為を用いる可能性が高かった．また，暴力行為をうけた経験のない選手も，規則に関する指導場面で暴力行為を用いる可能性が高かった．チーム運営において，目標を達成する，あるいはチームの凝集性を高めるという意味においても，メンバー全員が規則を守ることは重要である．規則を守らない選手がいるとチームの和が乱れ，メンバー全員に悪影響を及ぼす．将来，自分が指導的立場に就いた時，技術の指導場面とともに，生活面や規則遵守を指導する場面において暴力行為を用いる可能性が示唆された．

シドニー五輪女子マラソン 7 位の山口衛里選手らを育てた兵庫県西脇工業高校陸上競技部監督である渡辺公二氏は，過去の指導歴において，練習を怠けたくて倒れたふりをしたり，うそをついて練習をさぼり，バイクを乗りまわしていた生徒に手をあげたことがあるという．現在，定年退職後も同校の指導を続ける渡辺氏は，「今思うに，体罰に教育的効果なんてありません．生徒は殴られたことだけを覚えています．そのたびに，もっと言葉で納得させることはできなかったのかと悔やんでいます」[8]と語る．また，暴力行為をうけた駒澤大学付属苫小牧高校野球部部員は，「野球漬けの毎日で野球以外の生活面で指導をうけた記憶はない」[2]，「あの暴力から得たものは何もないし，なぜ殴られたのか納得できない」[2]と語る．これらは，スポーツ指導中の暴力行為の原因が，指導者の選手とのコミュニケーション能力の不足にあることを示唆している．言葉で伝えようとしても伝わらないもどかしさから，暴力行為に至るケースも多いのではないだろうか．指導者が選手との間に信頼関係を築き，コミュニケーション能力を向上させることで，暴力行為を減少させることができると提言できる．

本研究では，暴力という指導者の非人道的行為に自己の精神的，技術的成長を結びつけ，暴力行為を受けたという事実をうまく昇華している選手がいることが明らかになった．この場合，暴力の裏側に指導者と選手との揺るぎない信頼関係が存在すると考えられる．スポーツ指導場面における指導者の暴力行為は，指導者と選手との間の信頼関係の構築度合いにより，そのとらえ方が異なる可能性がある．しかし，本研究では，これらのことを明らかにすることはできなかった．今後，スポーツ指導場面における指導者の暴力行為の裏側に存在する指導者の考えと，指導者と選手との間の信頼関係との関連性を明らかにすることが必要であると考えられる．

要　約

本研究では，高等学校のクラブ活動における指導者の暴力行為の実態と暴力行為に対する選手の考え方を明らかにするために，高校時代にクラブ活動を行ってきた女子大学生 226 名を対象に，アンケート調査を行った．

結果は以下の通りであった.

(1) 暴力行為をうけた経験がある選手は全体の 28.8%おり，それは球技系のクラブに多い.

(2) 暴力行為をうけた経験のある選手のほうが経験のない選手に比べて競技レベルが高い.

(3) 試合出場の機会が増えるにつれ暴力行為をうける頻度が高くなる.

(4) 暴力行為の手段は,「パーでビンタ」が多く，その理由は,「プレーができていない」が多い.

(5) 選手は暴力行為をうけることに対して,「悔しいが自分が悪いから仕方がない」と考え，暴力行為をうけた結果, 精神的にも技術的にも成長したと解釈し, 指導者に対して感謝の念を抱く傾向がある.

(6) 暴力行為に対して，暴力行為をうけた経験のある選手は,「場合によっては必要」と考えている選手が多く，暴力行為をうけた経験のない選手は,「必要でない」と考えている選手が多い.

(7) 将来指導者になった時，暴力行為をうけた経験のある選手も暴力行為をうけた経験のない選手も,「規則を守らなかった時」に暴力行為を行う可能性が高い.

謝　辞

本研究をすすめるにあたり，データの収集に関してご協力いただきました池田菜々子さんに厚く感謝申し上げます.

文　献

1）阿江美恵子,「運動部指導者の暴力的行動の影響：社会的影響過程の視点から」，体育学研究，45，89−103（2000）

2）朝日新聞，体罰を考える 2「連覇の陰で練習漬け，優しさ届かず」2006 年 6 月 10 日

3）朝日新聞，体罰を考える 3「自分の不祥事，報告できず理事長辞任」2006 年 6 月 11 日

4）朝日新聞，体罰を考える 4「暴力の連鎖「拳より言葉」模索続く」2006 年 6 月 12 日

5）朝日新聞，体罰を考える 1「成果求め情熱暴走」2006 年 6 月 12 日

6）朝日新聞，体罰を語る 1「指導者から意識改革を」2006 年 6 月 13 日

7）朝日新聞，体罰を語る 2「生徒への思いが壁破る」2006 年 6 月 14 日

8）朝日新聞，体罰を語る 5「長所褒め，自主性尊重を」2006 年 6 月 17 日